

## ワシントンの幣原喜重郎

井戸桂子

### Sidehara Kijuro in Washington D. C. —Japanese Ambassador to the United States during the Washington Conference of 1921—

Keiko IDO

#### ABSTRACT

Shidehara Kijuro (1872~1951) was known as Prime Minister when the present Constitution of Japan was drafted in 1946. However he originally started his career as a liberal diplomat, who promoted cooperative diplomacy with the great western powers. The mainstay of all his diplomatic principles as well as his distinguished ability in English were initially formed in his early days abroad. This paper addresses his first service in Washington D. C. as Counselor between 1912 and 1913 and his second one there as Ambassador to the United States from 1919 through to 1922. Shidehara's American career will be examined from a new aspect of research until now never addressed and based on American documents including newspapers such as *The New York Times*.

Shidehara's first American diplomatic assignment was devoted to the serious problem of Japanese immigrants in California, and he was deeply inspired and edified by the then British Ambassador James Bryce's manoeuvres, particularly by Bryce's wise non-action after the discussions became deadlocked. Notwithstanding the hard work, Shidehara enjoyed canoeing on the Potomac River with his colleagues in summer.

During his Ambassadorial secondment to the States one of the most significant diplomatic negotiations that Shidehara undertook was at the Washington Conference of 1921. As one of three delegated Japanese negotiators he assumed the defacto leadership of the entire negotiation team. The preceding events typified his role in this conference and many international diplomats remembered his heroic efforts to reach the agreement with China re the Shantung problems despite the excruciating pain he suffered from kidney stones. The American media followed, watched, and supported his actions and remarks almost everyday when he was on the dais.

Though his diplomacy has received widely differing evaluations, most non-Japanese observers regarded the so-called "Shidehara diplomacy" as one of positive international

cooperation and conciliation. The reason for this support was derived from his exemplary efforts during his fruitful ambassadorial days.

- 1、はじめに
- 2、修行時代
- 3、在米日本大使館参事官の1年3ヶ月
- 4、駐米大使の2年余り
- 5、おわりに

## 1、はじめに

幣原喜重郎（しではら・きじゅうろう、1872年・明治5年—1951年・昭和26年）は、戦後二人目の総理大臣として新憲法の制定に携わり、戦争放棄発案の鍵を握る人物とされている。戦前に目を向ければ、1924年（大正13年）からおよそ10年間、軍部の抵抗に遭いながらも、「幣原外交」と呼ばれる国際協調路線を保とうと努力した外務大臣でもある。

さらに、その職歴をさかのぼれば、1919年から22年にかけて駐米大使を務め、1921—22年のワシントン会議では、3人の日本全権の一人に指名された。1922年1月、決裂直前の日中交渉を、腎臓結石の病床から通いながら、その迫力ある英語で一気にとめあげた、「アンバサダー（大使）・シデハラ」である。もちろん「アンバサダー」に就任する前には、一外交官としての修行時代がある。駐米大使の直前は、外務次官を43歳から4年間勤めたが、その前には、韓国を振り出しに米国、英国、オランダの在外勤務を合計10年間余り経験し、本省勤務はおよそ8年間で、電信課長と取調局長等に任ぜられた。

このように幣原は、卓越した英語力に裏打ちされた、国際協調を信念とする一外交官としてそのキャリアを開始し、第二次世界大戦中は在野に伏したものの、総理大臣まで務めて80年の生涯を終えた。これまで、幣原喜重郎に関して

は、総理大臣として携わった憲法制定や外務大臣時代の「幣原外交」をめぐる論文、あるいは、最近英語力に注目した論文も発表されている。しかし、英語を学び外交の舞台を目の当たりにした、彼の外交官としての在外生活を扱ったものはない。ことに、大使はもちろん参事官としても滞在した、米国ワシントン時代に関する論考は、いまだに書かれていない。

幸い筆者はワシントンD. C. に暮らし、アメリカ側の資料に触れる機会も得たので、本稿では、幣原喜重郎が参事官（1年3ヶ月）そして駐米大使（2年4ヶ月）として過ごしたワシントンで、彼が学び求めたものを追跡したい。また、同じ時期、日本と欧米の関係に心を配った、日本の文化人（岡倉天心・新渡戸稲造・夏目漱石）と幣原を比較することによって、当時の時代背景も浮かび上がらせたい。

## 2、修行時代

幣原喜重郎が駐米参事官としてワシントンの地を踏むのは、40歳のことである。それまでは外交官としての修行時代を、韓国、英国、本省で過ごした。幣原は英語に上達するために、大変努力したが、まずは、中学校時代のエピソードから紹介する。

大阪府門真の教育熱心な地主の次男として生まれた幣原は、小学校から抜群の成績をおさめ、兄に続いて、当時日本で唯一の官立の中学校、大阪中学校に入学した。ちなみに、この中学は、彼の在学中に第三高等中学校と改名し、京都へ移転して、学生が全国から集まるようになった。幣原は四国の土佐からの新入生、浜口雄幸（後に総理）と同級生になり、首席争いをする。そのころのエピソードが、彼自身の著作、『外交五

十年』に記されている<sup>#1)</sup>。明治当初に試みられた、いわゆるネイティブばかりの教師による学校教育は当時すでに中止となっていたが、この大阪中学校には珍しいことにネイティブの英語教師がいた。ある日のこと、この教師が生徒に英語で質問した。皆何を言っているのかわからなくて先生もいらだってきたときに、幣原は、拳手をして、とっさに“See the moon!”と応えた。すると、この先生は大変感激して、幣原の手を取ったり肩を叩いたりして盛んに褒めた。教室でも、歓声が上がった。

このエピソードは、彼の英語力の萌芽として紹介されることが多い。しかし本稿では、彼の場のまとめ上げの巧みさに注目したい。教室内の行き詰った雰囲気を一気に解消したうえ、自分自身は、先生と同輩と両方からの栄誉を受けるのである。まさに、広い意味での外交の力であろう。また、このネイティブの先生の褒め方がとても良い。発言者には自信をつけさせ、他の生徒にもあなりたいと思わせるのである。幣原少年にとっても、単に成績優秀で褒められるという心地よさだけではない爽快感、自分が認められ周囲にも役立ったという充実感が、たまらなく嬉しかっただろう。六十年以上たってからこの挿話を語ったのは、それなりの鮮烈な印象が、少年の心に刻み込まれていたからであろう。

こうした英語の授業を受けた幣原は、東京帝国大学法科に進み、1896年（明治29年）24歳で外務省入りする。早速に、韓国の仁川の領事館勤務を命ぜられるが、ここでも、ひとつ英語に関する話がある<sup>#2)</sup>。

それは、美しいイギリス女性とのロマンスである。その女性は仁川駐在のイギリス外交官の妹で、幣原に「日本人であなほど英語の上手な方は初めてです。」と告げたことから、二人の交際が始まったらしい。ここで、彼の英語がす

で認められ始めた、と感心するよりも、むしろ、外国人と恋愛関係になることを一切躊躇しない、彼の社交性、あるいは、洒脱さに注目したい。日清戦争が終わったところの明治期に、新渡戸稲造とメアリー夫人の例はあるものの、外国人とのロマンスあるいは結婚までを考えると、これは、大阪の地主の次男としては、しかも外交官としての立場を考えれば、かなり先進的な考えの持ち主である。大阪中学時代も、浜口雄幸に比べるとずいぶん闊達で、都会少年であったと伝えられているが、このロマンスは幣原が、物にこだわらない、あるいは評判などに固執しないで、その場や状況を楽しめる、さらりとした性格であったことを、示すものと考えられる。ちなみにこの女性とはその後もロンドン勤務時代に再会し交際を再開する。

1899年（明治32年）、27歳の夏、在英国日本総領事館勤務を命じられ、仁川からロンドンに赴任する。いよいよ英語圏での勤務の開始である。

彼の英語は通じたか？ここで『外交五十年』に記された内容を紹介する<sup>#3)</sup>。英語に多少とも自信のあった幣原は、着任早々、仕事で植民省に出かけることがあったが、その際に拾った馬車の御者に言葉が通じず、「これでは本当の英語ではない」と気づき、「英語をやり直さなければならぬ」と決心する。植民省の役人とは通じて、「一般のイギリスの誰にでも通じる英語」でなければ、と、一念発起するのである。早速、英語の個人教授につく。先生の名は残されていないが、先生は彼に、毎回3—4ページの文章を暗記させ、発音や調子の誤りを正したというのであった。しかし単なる会話でそれを直すのではなく、名文を暗記させて発音や調子を直す、というところが、この先生の優れたところであった<sup>#4)</sup>。この徹底した訓練のおかげで、幣原は英語の調子の根本を学び、同時に文章英語の

レベルの高さも文字通り、身につけることが出来た。

さて、1899年と言えば、第五高等学校教授の夏目金之助が文部省から派遣されてロンドンへ留学したのと、ほぼ同時期である。すなわち、33歳の夏目は1900年(明治33年)から1902年(明治35年)に留学し、英国と精神的に格闘し、日英同盟の締結とヴィクトリア女王の崩御とをかの地で目撃している。夏目の到着は1900年の10月末で、幣原はその年の12月末にベルギーのアントワープへ転じるので、ほんの2ヶ月ではあるが、ロンドンの空気をともに吸っている。そして、20世紀への転換の年に滞在した二人の日本人には、東洋の小国から文明の先進国にやって来たエリートとして共通点が発見できるし、その一方、両者の仕事も性格も違うので相違点も見られる。

その共通点とは、日本から来たエリートとしての意気込みである。片や、不平等条約を解消してまだそれほど年数の経ていない小国の若き外交官として、片や、英語研究を期待されているアカデミズムの新進の研究者として、どちらも、その両肩にかかっているものは大きい。そんな日本人が世界の最先端の文明国に来て、まず何をするか?その答えは「二人とも外形を固める」である。すなわち、身なりを整え、英語を磨く。夏目がロンドン時代、顔をそり、白シャツとアイロンのかかった洋服にこだわっていたことは、有名である。幣原も、山高帽にステッキを持って散歩をするという習慣をロンドンで仕込んで、米国でもそれを実行している。2回目のロンドン勤務での同僚の証言によれば<sup>註5)</sup>、なかなかの洋服通で、街一番の洋装店に通い良い生地で作らせて、シャツも最上等であった。夏目の場合、痘痕や背が低いといったコンプレックスの裏返しとして服装に特に気を遣ったといわれているが、二人に限らず英国に

住もうとする日本人なら、まず身だしなみを心がけるのは、ごく当然である。そして身だしなみを整えた後は、言葉を整えなければならない。幣原も、夏目も、日本ではそれなりに英語に対する自信はある。だからこそ、本場の英国に来て英語をどのように一層勉強するかは大事な問題である。両者、個人教授のもとで勉強する。幣原は古典の暗記、夏目はかのクレイグ先生との文学談義によって、英語力を向上させようと努力する。二人とも、その英語教師のことを良く覚えていて、幣原は、引退後に『外交五十年』で紹介するし、夏目は作家として独立してから、心温まる佳品『クレイグ先生』にまとめている。一外交官、一留学生にとって英語教師の影響がそれだけ大きいことが見て取れるし、彼らの意気込みもまた大きかったことを表している。

外形を固めたあとは、いよいよ仕事へ取り組みねばならない。これは両者、対照的な結果となった。幣原は27歳の独身外交官として、身分も保証され、嬉々として仕事に取り組む。従来の外交官は豪放磊落に外交を取り仕切るタイプが多かったが、幣原は、外交官試験の二期生としての新しい能吏タイプの外交官であった。国際法と語学を勉強し、内外調査も着実にこなし、だからこそ、将来有望な人物とロンドン領事館でも注目され始めたのである。その結果、岩崎家の婿である駐英公使加藤高明(後の外務大臣、総理)が妻の末妹、雅子の縁談相手として、幣原に白羽の矢を立てることになった。と同時に、先ほども触れたが、仁川時代のイギリス女性と再会し、ロマンスが再び花開いてもいた。ちなみに彼は、親の意を汲んで、数年後の釜山勤務時代に雅子と家庭を持つことになる。外交官としての制約もあり、国際結婚は結局成り立たなかった。ロンドンに話を戻せば、20歳代最後の独身時代、幣原は英語を磨き、外交を勉強し、ロマンスもあり、周囲に認められ、そ

して、枢要ポストであるベルギーのアントワープ領事に栄転する。まさに精神的にも健康で充実した日々となる。一方の33歳、日本に妻子を残してきた夏目の苦労は、いまさら指摘しなくともよいだろう。失望による二ヶ月での大学通学の中止。英国人へのコンプレックスと日本人の不甲斐なきの自覚。英語研究と自分の将来へのジレンマ。英国での夏目の精神的葛藤は、帰国命令が出るほどにまで、昂じた。この二人の幸不幸は、性格と立場の違いによるものでもあるが、幣原とて、表面はロンドン生活が充実して楽しんでいるように見えても、やはり、百年前イギリスに駐在するには、それなりの努力をしなければならなかったということを、夏目が傍証として示してくれる。幣原とて、健康で充実した日々を過ごすには、土台となる英語習得へも仕事へも必死に取り組まねばならなかった。そうでなければ、日本人は異国で認められなかった。

アントワープと釜山での領事勤務を経て、幣原は本省に電信課長代理として戻る。釜山時代に結婚し、長男も伴っての、32歳での帰朝である。この本省時代、彼の英語力に関して見過ごせないのは、外務省の顧問デニソンとの出会いである<sup>60</sup>。

デニソンは、はじめ米国副領事として1874年(明治7年)、横浜に勤務し、その後国務省を退職したが、推薦もあって1880年(明治13年)、外務省顧問となり歴代の外務大臣の信任があつかった。ことに海外へ向けての英語の電信文や外交文書、たとえば訓令文、条約交渉文を指導したし、実際に名文の誉れ高い電信文を残した。当時は電信による外交交信の時代であったので、デニソンは実に重要な役目を帯びていた。もちろん電信課に配属された幣原は、外務省の中でも重要なポストを得たといえるし、デニソンと日常的に会えるというのは、英語の面だけでな

く、教わる場所が多かった。二人は、毎朝出勤前に皇居一周、一時間の散歩をすることが多く、おかげで幣原は英語の会話力を高めるだけでなく、話をしながら電信文の書き方を通じての外交の極意を直接に学ぶことが出来た。たとえば、外交交渉の際に、電文を柔らかい調子で書くか、厳しい調子で書くか、それはこちらが戦争を覚悟しているかどうかによる、という重要な話も含まれていた。また、あるとき役所でデニソンと共に古い電文を処分整理していた際に、名電文として名高い、ある交渉電文の、その推敲の過程がわかる草案が出てきたので、幣原が勉強のためにほしいと請うと、交渉の成功は小村外相の手柄なのに自分の名が残るのを嫌ったデニソンは、草案をすべてストーブの火にくべてしまった、というエピソードもある。デニソンの謙虚な人柄を示すエピソードといわれるが、と同時に、本来外交は政治家がして役人は黒子に徹する、という立場を貫いた例と考えられる。表舞台に出なければならぬときと舞台裏に控えなければならぬときと、役人としての外交官の心得を幣原は学んだ。単なる英語の達人外交官を超えるには、こうした学びの出会いがいくつも必要である。

もうひとつ、電信課長時代、幣原の正直な信念を示すものとして、電信暗号をめぐる事件がある<sup>61</sup>。ある日、妙な外国人がアメリカの暗号を読み解いたとって売り込みに来たので、調べてみると本物であった。そこで幣原は米国国務省に盗まれている事実を通知して、国務省から感謝されたというものである。正しい外交官の信念、これはその後も一直線に貫かれていく。近い将来、ワシントンやロンドンで、外交とは何かの薫陶を直接得ることになるが、それを学び得る下地は、若き幣原個人にすでに準備されていた。

電信課長の次に、取調課長として条約につい

での仕事に携わったのち、1912年（大正元年）の夏、40歳にて、駐米参事官に栄転する。初めてのワシントン D. C. である。

### 3、在米日本大使館参事官の1年3ヶ月

幣原は1912年9月8日ワシントン D. C. に到着し、翌年の12月にロンドンの大使館参事官に転じるまで、1年3ヶ月を米国の首都で過ごす。妻子は日本においての単身赴任であった。

ワシントンの駐米日本国大使館はLストリート1310番地にあった。ホワイトハウスの北東一キロ弱のところだが、チャイナタウンに近い下町で、余り環境の良いところとはいえない。ちなみに、幣原は大使時代（1919年—1922年）もここで過ごす。陋屋で有名な大使館及び大使公邸は、ようやくその後十年ほど経った1931年（昭和6年）、現在大使館のあるマサチューセッツ通りに、新築して引っ越した。

さて当時の日米関係の懸案はカリフォルニアの移民を巡る排日問題で、珍田捨己大使はその難題を処理する際の女房役となる参事官に、幣原を東京から呼びよせた。折から明治天皇崩御の年と重なり、幣原の滞在はおおむね諒闇中で社交も少なく、単身赴任の参事官としては、もっぱら仕事に精勤し、とりわけカリフォルニア日本人排斥問題にあたった。この移民問題は根が深く、ベテランの駐日イギリス外交官が現地確かめたときですら、「たずねる人すべてが違うことを言っている」とあきれほどの複雑さであった<sup>8)</sup>。増え続ける日系移民に対し1908年に日米で紳士協定を取り交わして、日本人は家族以外新たに渡米しないことにしたが、いわゆる写真花嫁による結婚と子供の誕生が問題となり、1913年8月カリフォルニア州土地所有禁止法が事実上実施されるころであった。国務省も裁定を試みようとしたが却って逆効果で、日本政府は、米国大審院に、条約違反ということ

で訴追するかどうかの判断を迫られていた。その判断決定のために新任の参事官は、米国の法律家とともに勝訴の可能性があるかどうかを検討したが、結局断念することとなった。また善後策として最恵国待遇を保障する追加の通商条約締結も米政府に非公式に提案したが、進展せず、交渉は打ち切られた。この移民問題は因縁ともいえるほど幣原にかかわり、7年後の大使時代も、その後の外務大臣時代もずっと懸案となるのである。

その移民問題で苦慮しているとき、幣原は、日曜の散歩の途中に立ち寄った駐米イギリス大使ブライスから、良い薫陶を授けられたことがあった。『外交五十年』によれば<sup>9)</sup>、突然の来訪にもかかわらず、ブライスは快く幣原を書斎に招き入れてくれた。幣原はブライスに、当時英米間で懸案になっていた問題について、すなわち、アメリカ政府がパナマ運河通行税を外国船に課税することに対して、イギリス政府は抗議を続けるかどうかについて尋ねた。するとブライスは、戦争する覚悟がない相手には抗議を続けない、と答え、同じように、日本もアメリカに抗議を続けて、移民問題程度のことで存亡をかけた戦争をするのは意味がない、目先の利害に拘泥しないように、と諭した。そして、アメリカは自らの不公平を他から言われるのは嫌がるが自分の意思で正すことが多いと、指摘した。そして実際、パナマの通行税はその後アメリカ政府の方から自主的にとり下げられた。ちなみに移民排斥も、1931年に廃案の気運があったが、満州事変により、立ち消えになったというから、ブライスの予見はまさにその通りになったのである。『外交五十年』で幣原自身感心すること、しきりであった。強く出るか、引くか、戦争の覚悟いかんというのは、デニソンの電文の極意と同じである。外交の根本は戦争か否か、ということを実感する。

ところでこの時期、移民問題が実に厳しくなるが、それは、開国後ちょうど半世紀を経て、欧米列強に追いつこうとした日本への風当たりが強くなった証拠である。正体の知れない東洋の小国日本が、なぜか急に世界に出てきて自分たちの庭を荒らしている、という印象が欧米列強に広まっていく。日本外務省としては、世界の誤った認識を改善しようとするが、同時期、在野においても、日本と欧米の相互理解に努力した日本の国際人がいた。新渡戸稲造(1862年・文久2年—1933年・昭和8年)と岡倉天心(1862年・文久2年—1913年・大正2年)である。夏目金之助がクレイグ先生と心を通わせてこの老学者に日本人を理解してもらったのに比べると、はるかに規模の大きい展開を、同年生まれの二人の国際人は実行した。

まず新渡戸であるが、夏目と幣原がロンドンに滞在していた1899年(明治32年)、*Bushido, the Soul of Japan* をアメリカで英文出版し、日本人の道徳の価値と精神性を世界に宣揚した。アメリカのシオドア・ルーズベルト大統領もこの書を愛読し、その結果、サンフランシスコでの日本人学童隔離事件に際しても感情的にならずに、1908年の紳士協定締結に向けてアメリカ政府は努力することになったという。新渡戸はその後日本に戻り教育者として活躍するが、1911年日米交換教授第一号として、米国でも教鞭を取り太平洋問題を講じる。片や岡倉天心は、新渡戸の『武士道』に続いて、*The Ideals of the East* (1903, London, 1904, New York) そして *The Awakening of Japan* (1904, New York) さらに *The Book of Tea* (1906, New York) を英文出版する。1904年からはボストン美術館東洋部顧問として和服姿で華々しく活躍したことは、よく知られている。

こうした稀に見る国際人二人のアメリカでの活躍は、ちょうど、幣原が参事官としてワシ

ントンに赴任するのに先立つ、1900年代初めの10年間のことである。日本を認識してもらうためには、彼らのようなスーパー日本人の在野の努力が必要であったし、裏返していえば、それだけ相互理解には時間がかかる上に一筋縄ではいかないことを示す。幣原が外交官として海外に出て外交の勉強を重ねたのは、そのような時代であった。

そのような時代であっても、いやそのような苦勞の時代だからこそ、ワシントンの大使館同僚と共に、幣原は楽しく余暇を過ごすこともあった。その当時の同僚の語るところによれば<sup>#10</sup>、夏、ワシントン郊外のグレンエコーやポトマック川で、ハイキングやカヌー漕ぎを楽しんだ。グレンエコーはワシントンから北西に車で20分ほどのところで、近辺の散歩道の中心となっており、古くからあるグレンエコー・インというホテル兼レストランが、今も大変にぎわっている。付近で獲れるという鱒や素朴なステーキなどを供して人気がある。アメリカ赤十字の創立者、クララ・バートンの私邸が、公園の一角に公開されてもいる。このあたり、緑深く、運河もあって、現在もカヌーやボートの姿がある。およそ90年前、大使館の同僚の中には、後の斉藤博駐米大使の若き外交官補時代の姿もあって、幣原と斉藤は、共によくカヌーを漕いだ。ちなみにこの斉藤はその英語力を幣原にとくと認められているし<sup>#11</sup>、大使として赴任中の1939年(昭和14年)、ワシントンのホテルで客死したとき、ルーズベルト大統領が遺骨を巡洋艦で日本へ護送してくれた大使であった。共に日米関係に苦慮した二人の大使の、若い時代の夏の一こまが、目に浮かぶ。また、ある暑い夏の午後、幣原参事官は、大使館の事務室に大きなテーブルを出して、全員を呼び、ワイシャツ姿の無礼講で、惜しげもなくスイカ食べ放題を実行したという。冷房もない時代、ワシントンはもとも

と湿地帯なのでとても蒸し暑く、気温も30度はすぐに超えた。日本の西瓜以上に大きく、フットボールのように楕円形の西洋スイカが、次々に切られて、瞬く間に皮と種だけになっていく様子が想像される。幣原の愉快的な性格も、伝わる。

しかしそんな思い出の夏が終わると、幣原は、ロンドンの大使館に参事官として転じる。1913年(大正2年)暮れのことである。ロンドンたった半年の滞在であるが、議会関係の調査をよくおこなった。そして議会を傍聴しに行つて知己を得た、外務大臣サー・エドワード・グレイが、幣原にとって三人目の外交の師となる。

『外交五十年』によれば<sup>#12)</sup>、メキシコ油田のイギリス人支配人殺害に端を発して、英国居留民保護をめぐる英米間の摩擦が起きたが、その際グレイ外務大臣は、アメリカに対して英国は抗議を続けない、と、議会で表明した。さらにイギリスの新聞もグレイの方針を支持したのである。もし日本だったらその外務大臣は新聞からも国民からも非難され殺されかねない、と幣原は案じ、尋ねたことがあった。答えは明瞭であった。このくらいのことでイギリスはアメリカと戦争しないのだから、黙っていたほうが得策だというものである。そのことを、外務大臣だけでなく、新聞も国民も知っているのである。これはパナマでの通行税の抗議を差し控えた、ブライス大使と同じ考えである。幣原は、またひとつイギリス外交の要諦を学んだと自覚した。交渉を重ね、引くときは引く、という欧米の合理的な協調外交の真髓を、幣原は着実に身に付けていった。

たった半年ロンドンに勤務して転任することになった送別会では、幣原はひとついたずらをした<sup>#13)</sup>。リッツ・ホテルに大使夫妻以下を招いて御礼の食事会となったその送別会で、フラン

ス料理では美味なものと扱われている蛙の料理を、材料を明かさないうで供し、皆さんおいしく食べ終わった後、侯爵井上大使の令夫人にその正体を打ち明けて、大変驚かせたのである。ユーモアがあるといわれる幣原の、またひとつの例である。

ロンドンの後、オランダのハーグの公使を経て、1915年(大正4年)の末に帰朝した。43歳にして、外務次官に就任し、大隈、寺内、原の3内閣、5人の外務大臣を支えた。第一次世界大戦後の世界を治めるパリの講和会議を扱ったのも、幣原次官である。そして、元老政治が終わって初めての議院内閣といわれる原首班内閣で、いよいよ駐米大使、幣原喜重郎が誕生する。1919年(大正8年)、47歳の秋である。

#### 4、駐米大使の2年余り

ここで二つの新聞記事を比べたい<sup>#14)</sup>。ひとつは米国ジョージタウン大学図書館のマイクロフィルムから、もうひとつは、日本の国会図書館の資料から、見つけたものである。

サンフランシスコでの日本からの新任の使者——幣原大使、彼の義務と大望は協力の推進と表明——

カリフォルニア州、サンフランシスコ、10月26日発

新任の駐米日本国大使、幣原喜重郎は、本日サイベリア丸にて到着した。火曜日の朝(28日)ワシントンに向けて発つ。以下は彼の演説の一部である。

(筆者訳。このあと、幣原の英語スピーチの抜粋が32行にわたり掲載される。)

幣原大使桑港到着 米国通信社発

新駐米大使幣原喜重郎氏は二七日西伯利丸にて桑港に到着せり



初めの記事、すなわち見出し付き、大きさにして堂々縦13センチにわたる記事は、『ニューヨーク・タイムズ』の1919年10月27日付のものである。次に挙げた、これですべての全4行の記事は、『東京朝日新聞』大正8年10月29日付である。前者は新任幣原が日米両国の友好の推進に努力すると宣言するさまを逐次的かつ好意的に紹介するのに対し、後者は、実に到着の事実しか報じていない。この記事の容量の差は、奇しくも、アメリカと日本の、後の「幣原協調外交」というものに対する理解の差を表してはいないだろうか。

この日、1919年（大正8年）10月26日から2年余り、幣原は、外交後進国の日本から世界のリーダーになりつつあるアメリカ合衆国に大使として乗り込む。1921年末のワシントン会議では日本全権の一人として議事をまとめ、英米と共に協調路線を推し進める1920年代の外交の基礎を築くことになる。しかしこの日米両記事の扱いの差が象徴しているように、外交路線の違う2カ国をまとめるのは、大使にとって、至難の業であった。本章では、幣原の公私にわたる努力の跡をたどりたい。

11月1日にワシントン入りした幣原は翌々日の11月3日、國務長官ランシングを訪問したことが、11月4日付の『ニューヨーク・タイムズ』で確認できる。幣原は長官に、ウィルソン大統領に面会し信任状の送呈をしたいと伝えた<sup>#15</sup>。

妻の雅子を伴っての赴任であるが、大使館と大使公邸は、十年前とまったく同じである。懐かしい陋屋で迎えてくれた大使館スタッフのメンバーは<sup>#16</sup>、参事官がいなくて、一等書記官に佐分利貞男（まもなく参事官に昇格）、広田弘毅、そのほか、芝二等書記官、加来、富井、天城、石射の三等書記官で、官補も4人いた。陸海軍は別々に事務所を持っていたが、その中に

は山本五十六中佐もいた。佐分利と広田の両一等書記官は、早くから外務省内で注目されていた人材だった。佐分利は小村元外相の女婿であったが、社交家のエリートで、幣原の『外交五十年』での記述を見ても、かわいがられていたことがよくわかる。一方、広田は黙々と仕事をこなすタイプだった。翌年幣原が男爵位を授けられたときも特にお祝いと言う訳ではなかったが、次に述べるモーリスと20回を超える移民問題の会談を幣原が行った際に、その綿密な資料を整え、後に松岡洋祐も驚くほどの会談記録を残したのは、広田書記官であった。

すなわち、大使幣原を待ち構えていた懸案の仕事のうち第一は、やはりカリフォルニアでの排日問題であった。赴任まもなくの1920年1月、日本政府は、写真結婚を全面的に禁止したものの、カリフォルニア州での厳しい状況は変わらなかった。それどころか新たに、借地も奪われる土地改正法を、この年の11月の大統領選挙で直接発案、すなわちイニシアチブにかけようとしていた。それぞれの国民感情を鎮めるべく、幣原と駐日アメリカ大使のモーリスは非公式ではあるが会談を持つこととした<sup>#17</sup>。それは9月15日の予備会談から翌1921年1月24日の第23回の最終会談まで及んだ。何と、4ヶ月に23回、大統領選やクリスマスを入れての、5日に一度のペースである。このハードなスケジュールのもと、幣原とモーリスは、州法に優先する条約という形での解決を目指し、その条約を1911年の日米通商航海条約の追加とさせる形を望んだ。

しかし、時の運は、この二人に微笑んではくれなかった。ウィルソン大統領は会談最中の1920年11月の大統領選挙に敗れ、次期大統領は共和党のハーディングへと替わることとなった。新条約案を大使二人が手交したにもかかわらず、最終会談が1月24日に終わったのち2月になっても、コルビー國務長官（ランシングから交代

した新国務長官)はウィルソン大統領に一連の会談結果の最終報告をしていなかったし、民主党員のモーリスにしても、共和党を説得する自信はなかった。日本側は、ウィルソン大統領が退陣前にこの案を上院にかけてくれることを望んだが、無理な注文であった。そして、3月初めハーディング大統領とヒューズ国務長官の新体制になると、もう彼らはワシントン会議の招集のことで忙殺され、この旧政権下の手交した非公式の会談結果を、扱っている余裕はなかった。

ところで交渉が進められている期間中、『ニューヨーク・タイムズ』は、両者の会談に関する記事を頻繁に掲載していた。1920年8月29日に、何と第一面の囲み記事で、幣原が東京の了解を得てコルビーと会ったことを報じたのを始め、週一回のペースで、すなわち彼らが会談を持つたびに、報告の記事が掲載される。条約案になるとの見通しや、会談は成功か、という吉兆の記事も発見できる。クリスマス前には、ニューヨークの日米協会が主催した恒例の晩餐会に、幣原とモーリスの両大使が招かれて、親善ムードを盛り上げたが、同紙はそれもきちんと追跡して報告する。尚、交渉最中の9月8日には、日本政府が幣原を含むパリ講和会議参加メンバーに爵位を贈った旨が報じられ、その後、幣原は、必ず「大使幣原男爵」として紙上では取り扱われている<sup>18)</sup>。

カリフォルニア移民問題のほか、ヤップ島問題、西シベリア撤兵問題、(この二つはワシントン会議に持ち込まれた)、天津事件、ラングドン射殺事件などが、幣原大使在任中の前半に課せられた懸案事項であった。幣原はこれらを実に合理的に、一つ一つ相互の問題点を指摘し、解決した。しかしこうしたおもての仕事面のほかに、大使としての社交の面も、幣原にとっては大切な仕事であった。

幸い今回の赴任では妻雅子を伴ったのだが、そもそも岩崎弥太郎の末娘雅子は、姉が加藤高明駐英日本大使夫人としてロンドンに滞在していたときに、イギリスの私塾に留学し、姉夫妻が帰国後も5年間残って教育を受け、すべて英国風のマナーを身に着けていた。そのため、新婚や子供の小さいときは夫に家で夕食をとることを望み、同僚にからかわれたこともあったようだが、今回は彼女の英国仕込みが幸いした<sup>19)</sup>。大使夫妻は月に二、三回公邸で正式の晩餐会を催した。時まさに1920年、禁酒法が施行された年である。ちなみにこの法律は1933年まで続くのだから、幣原以下の大使たちが法律の及ばない公邸で催したパーティは、招待客にとってお酒を飲める貴重な機会であった。招待客の喜びようは容易に想像できる。雅子夫人の名ホステスぶりに加えて、外交団だから供することのできたお酒は、幣原のもてなしに強い味方となったに違いない。

現在の日本大使館には、この当時の招待者リストは保存されていないが、幸い1921年2月24日付の『ニューヨーク・タイムズ』が、幣原大使が開催したジョージ・ワシントンの誕生パーティにおいて、時の国務長官コルビーが日米友好のために乾杯をした旨を報告しているので、その一端を垣間見ることができる<sup>20)</sup>。現職の国務長官が一介の大使のパーティに來臨することは、現在でも稀なことであり、退陣前とはいえ、コルビーの幣原へ示した思いやりは相当であったといえる。それも、あの陋屋で有名な大使公邸を訪れてくれたのだから、幣原夫妻もさぞ嬉しかったに違いない。ただ残念なことに、コルビーを迎えてしばらくした五月、幣原の実父の病気により雅子は看病のため帰国し、夫妻揃って接客する社交の姿はもう見られなくなった。

1921年の春3月4日、ハーディング大統領が

就任し、新共和党政権が誕生した。幣原の相方の国務長官は、チャールズ・エヴァンス・ヒューズ（1862年—1948年）である。ニューヨーク州知事や最高裁副判事を勤め、1916年の大統領選ではウィルソンと戦って敗れた共和党候補という履歴を持っていた。この年59歳、幣原よりちょうど10歳年長で、政界の老巧者といわれた法律家である。幣原は離任する翌年浅春までの一年をヒューズと共に歩み、ワシントン体制という新構想を築くことになる。

幣原がヒューズからワシントンでの国際会議召集の案件を打ち明けられたのは、7月初めのことであった<sup>#21)</sup>。米国は、不干涉主義を唱えながらも目の上のたんこぶのごとき日英同盟の更新時期には敏感で、その上、議会からは海軍予算緊縮化のため各国に軍縮を求める動きもあった。こうした状況下、大統領とヒューズは、国際連盟とは別の新構想を米国主導で築き上げるべく、ワシントンで、イギリス、日本、フランス、米国の4カ国、さらに、太平洋問題に関係するイタリア、ベルギー、中国、オランダ、ポルトガルの計9カ国の会議を召集することにした。

ところがこの事実は従来指摘されていないが、日米間では、そう簡単に召集受諾に至らなかった。すなわち、正式の招聘状はすぐに手交されたが、東京は返答を留保したのである。日本は対米外交について現在では信じられないほど大変慎重であった。

それは、『ニューヨーク・タイムズ』がいみじくも明らかにしている<sup>#22)</sup>。すなわち、日本の躊躇と、早く受諾をしてほしいと望むヒューズの苛立ちとが、頻繁に報じられていた。ここで両国間の板ばさみで苦労したのは、もちろん幣原である。幣原は連日のようにヒューズに面会した。そして、アメリカは日中問題に於いては公平であること、ことに中国の山東問題に関して

は当事者の二カ国で討議することや、議題の拒否権が日本にあることなど、懸念される事項について議長となるヒューズと細かく詰めを行った。ようやく正式受諾にこぎつけたのは、8月のことであり、11日付の『ニューヨーク・タイムズ』は、原敬首相が日本は会議に誠実に参加する旨を表明した、と報じた。そして幣原大使が全権の一人として公式に指名されたことが、9月29日に同紙で報じられた<sup>#23)</sup>。

こうして11月12日に始まったワシントン会議であるが、幣原にとって、また日本にとって残念なことに、会議開始後まもない11月17日、持病の腎臓結石のために幣原は不参加を余儀なくされた。大使館で臥せりながら、部下の佐分利参事官から刻々と報告を聞くという状況に追い込まれた。余りの衰弱に、佐分利参事官は帰国したままになっていた雅子夫人を日本から呼びよせることにした。だが、病身の幣原を置いて、会議は着々と進行していく。

海軍の軍備縮小問題についていえば、海軍大臣で全権の一人の加藤友三郎が担当し、建艦割り当てを英・米・日で10・10・6とすることで妥結を見だし、また、日英同盟を廃棄して英米仏日の4カ国同盟を結ぶことについては、各国代表がヒューズの私邸に集まって相談することとなり、幣原はヒューズ家の応接間のソファーに横になりながら小声で話すことで参加することが出来た。しかし問題は、年末になっていよいよ泥沼化してきた、極東問題、山東問題である。中国は宣伝がうまく、また個人的な縁故を米政府内に持っていたことを巧みに使い、日本は大変形勢が不利であった。ここで立ち上がったのが、幣原であった。年が明けた1922年の1月、病軀に鞭をうって敢然と議場に向かった。

この山東会議の処理の成功は幣原にとっても印象深かったようで、『外交五十年』で詳しく述べている<sup>#24)</sup>。ことに、パリ講和会議で山東省の

鉄道を日本は買い取ることで決まっていたのに、それを盗人呼ばわりするのはおかしい、きちんとパリ講和会議の記録を調べるように、と、中国側に言い返したところ、会議の流れが一気に変わって、傍聴していた英米の関係者から会議の後に圧倒的な支持を得た、とのことである。

この経過を同じく『ニューヨーク・タイムズ』が刻々と伝えている。1922年1月7日付けによれば、中国は國務長官ヒューズと英国全権のバルフォアに訴えて、山東問題は「行き詰まり (dead lock)」となった。しかし、1月18日付けから、連続4日間、同紙は幣原の討議参加の模様を伝え、中には、発言テキストを掲載している部分もある。そして、1月23日には、「合意が待たれる」と述べた上で、中国を非難することさえしている。ついには25日、「日本勝利」の見出しを掲げ、26日、「ハーディング、中国に受け入れ要請」と報じる。晴れて、2月2日、合意文書が掲載される<sup>#25</sup>。「行き詰まり」から一転、討議参加後2週間以内で合意にこぎつけた幣原の手腕は見事というほかはない。ついでに言えば、「行き詰まり」記事が掲載された同じ1月7日に、日本全権の筆頭である徳川は、日本に向かって帰国の途についている。実質の討議はプロの外交官に任せて、社交に徹していた政治家の姿をいみじくも象徴しているようである。そして実質の仕事に任された幣原は、結石を抱えながらその仕事をまっとうした。

こうしてワシントン会議は終わった。『ニューヨーク・タイムズ』によれば、「日本は一番獲るところが大きかった。」<sup>#26</sup> 幣原も全権の一人として、責任を果たした。そして病氣療養のため一時帰国ということで、春、東京に帰る。外交の動静を追跡する『ニューヨーク・タイムズ』は、もちろん幣原の一時帰国を報じる。それも、「休暇で」という心遣いを見せて<sup>#27</sup>。そして奇しくも、日本が条約を批准したと報じた翌日の

1922年10月12日、同紙は、幣原の後任に埴原外務次官が当てられることを掲載した<sup>#28</sup>。幣原の一時帰国は、大使辞任となった。

## 5、おわりに

ワシントン会議での幣原の取った外交政策に対する評価はさまざまである。ことに日英同盟を破棄する結果に至ったことには批判がある。英国側とて、4カ国協議の全権であるバルフォア自身が、実はかつて日英同盟の初交渉や強化に携わった政治家であったので今回それを終焉させる運命に遭遇することとなり、「まるでわが子を殺すような気持ちだ」と述懐し、破棄に心安らかではなかった、との報告もある<sup>#29</sup>。日本側では、英国側が言い出していないのに、幣原が日英同盟を4カ国協議へと変換してしまい、事実上、この4カ国協議は日本にとって何の安全保障にもならなかったとの批判がある<sup>#30</sup>。

しかし幣原が、今回のワシントン会議で、日本の外交路線を、大陸外交を中心とする理想型から「欧米と共に」という現実重視型に戻したからこそ、また、欧米の外交団の中で個人的な信用を得たからこそ、その後の10年間、日本は国際社会の均衡に乗り、生き残れた。事実、満州事変が勃発したとき、アメリカの國務長官スチムソンは、「外相に幣原が居るから…」とすぐには動かず、幣原に不利なことはしないようにした<sup>#31</sup>。

それは同時に、幣原がワシントン会議を中心とした大使時代、欧米の信用を得るために、いかに個人的にも努力したかを示すものである。老練なヒューズやバルフォアを相手に、49歳の一外交官が、全権の一人として海軍の建艦割当て以外の実質的な外交交渉をすべて執り行ったことは、大変な仕事量であったし、まして病身とあっては、修羅場であったに違いない。しかも、いみじくも新聞の取扱量が示しているよう

に会議への関心度の高い国、アメリカにあって、アンバサダー・バロン・シデハラは、まさにメディアの注目を一身に浴びながら孤軍奮戦した、とあってよい。

では、それを乗り切れた秘訣は何か？もちろん彼の外交官としての合理主義や信念を挙げることが出来るであろう。しかし、“See the moon!”に始まったユーモアと度胸。イギリス女性との恋やおしゃれで洒落なことにかがわれる、飄々とした態度。そして何とんでも、大阪の地主の次男に生まれて外務省屈指の英語の達人にまでなった努力。こうした資質があってこそ、まだまだ日本が国際社会で背伸びをしていた時代に、幣原喜重郎は特筆されるべき外交官として内外に名を残すことが出来た。

さて、幣原の修行時代とほぼ同じ時期に海外で努力した人々は、幣原がワシントンで晴れ舞台を踏んでいた1920年代はじめ、どのような運命にあったのであろうか。すなわち、ロンドンで同じ時代の空気を吸った夏目金之助と、稀有な国際人の新渡戸稲造と岡倉天心である。3人と比べて本稿を終えたい。

幣原が27歳の書記官として英語も洋装も一から学び直していたとき、同じ街で5歳年長の夏目は、自分の仕事は英文学研究よりも作家であると自覚した。「西洋人ぶらないでよい」ことに気づき、「自分の鶴嘴をがちりと鉦脈に掘り当てた。」(講演『私の個人主義』より)不遇のロンドン時代のおかげで作家漱石は誕生した。帰国後、東大教授に着任したが、その後まもなく作家に専心し、『三四郎』『それから』以下の作品を残し、1916年(大正5年)、49歳で鬼籍の人となる。ロンドンで片や外交官、片や作家という目標を定めたが、漱石は一生の仕事をして10年余りで成し遂げて、幣原よりも先に生を終えた。幣原はまだまだ道半ばのとき、大使になる3年前

のことである。

ユニークな国際人の先達で、幣原よりも10歳年長の岡倉もまた、1913年(大正2年)に鬼籍の人となっている。1903年ロンドンで『東洋の目覚め』を出版して以来、1904年ボストン美術館東洋部顧問に就任し、『日本の目覚め』『茶の本』を次々英文出版して、日本と欧米を駆け巡っただけでなく、イザベラ・ガードナー夫人と交流し、また死の直前にはインドの女流詩人へ恋をして、縦横無尽の活躍をした、その一生を、51歳で閉じた。幣原がワシントンからロンドンの参事官へ転じるときである。

国際人のもう一人の先輩、新渡戸は、1918年(大正7年)東京女子大学の初代学長に就任し、その後、1920年(大正9年)から1926年(大正15年)まで国際連盟の事務局次長を勤める。ベルグソン、キュリー夫人やアインシュタインを擁した知的協力国際委員会(ユネスコの前身)を取りまとめ、その活躍ぶりは特筆される。大使幣原そして外相幣原の国際協調外交を、スイスのジュネーヴから支えた。退任後日米関係の悪化を苦慮したのは幣原と同じで、講演のために何度も渡米し、1933年(昭和8年)、カナダで開かれた太平洋会議に出席し、同地で客死する。幣原も1931年(昭和6年)の暮れ、若槻内閣崩壊と共に外相を辞し、在野に下っていたときである。

在野にいた幣原に、組閣の大命が下るのは、1945年、昭和20年10月6日、幣原が73歳のときであった。大使時代からすでに二十数年が経ち、交渉する相手も、ヒューズではなくマッカーサーに変わった。天皇の「人間宣言」の草稿に加わり半日で英文にしたこと、さらに、マッカーサーと通訳なしで憲法改正を協議したことは、元外交官シデハラならではの仕事であった。

## 注

- 注1) 幣原喜重郎『外交五十年』(日本図書センター、1998年) pp. 256-258 (以下『五十年』と略す)
- 注2) 宇治田直義『日本宰相列伝17 幣原喜重郎』(時事通信社、昭和60年) pp. 21-22、および 塩田潮『日本国憲法をつくった男』(文芸春秋、文春文庫、1998年) p. 72
- 注3) 『五十年』 pp. 252-255
- 注4) 齊藤兆史氏の『英語達人伝』での指摘(中央公論新社、中公新書、2000年) p. 112
- 注5) 幣原平和財団編集『幣原喜重郎』(同財団発行、昭和30年) pp. 73-74 (岸秘書官の回想)(以下、『幣原』と略す)
- 注6) 『五十年』 pp. 268-275
- 注7) 『幣原』 p. 76
- 注8) フランシス・ピゴット 長谷川才次訳『断たれたきずな』(下)(時事通信社、昭和34年) p. 27
- 注9) 『五十年』 pp. 54-57
- 注10) 『幣原』 p. 69
- 注11) 『五十年』 pp. 80-81
- 注12) 『五十年』 pp. 276-284
- 注13) 『幣原』 p. 74
- 注14) *The New York Times* October 27, 1919(11:5) (11ページの5列目。以下同様に、X:Yとは、XページのY列目、を示す)  
『東京朝日新聞』大正八年十月二十九日(四頁)
- 注15) *The New York Times* November 4, 1919 (5:5)
- 注16) 『幣原』 pp. 151 (石射猪太郎の述懐)
- 注17) この幣原モーリス会談については、蓑原俊洋「移民問題解決への二つの日米交渉」(『神戸法学雑誌』第50巻第1号、pp39-94)を参照。また、『五十年』 pp. 42-49
- 注18) *The New York Times* August 29, (1:4), September 8(17:8), September 16(1:3), October 20(1:4), November 7(16:1), December 16(19:4)1920
- 注19) 『幣原』 pp. 44-45、前掲『日本国憲法をつくった男』 pp. 125-126
- 注20) *The New York Times* February 24, 1921(3:7)
- 注21) 『五十年』 p. 63, 『幣原』 p. 196
- 注22) たとえば *The New York Times* July 15(1:8), 17(1:2), 20(1:1), 22(1:1), 26(1:4), 27(1:1), 1921の項
- 注23) *The New York Times* August 11, 1921(6:3), September 29, 1921(19:2)
- 注24) 『五十年』 pp. 91-105
- 注25) 以上、順に *The New York Times* January 18 (4:1), 21(p.4), 23(3:1), 25(3:1), 26(1:1,2), February 2 (p.4), 1922
- 注26) *The New York Times* February 6, 1922(1:8)
- 注27) *The New York Times* April 20, 1922(6:1)
- 注28) *The New York Times* October 12, 1922(6:1)
- 注29) 前掲書『断たれたきずな』(下) p. 16
- 注30) 岡崎久彦『幣原喜重郎とその時代』(PHP, 2000年) p. 197
- 注31) Henry L. Stimson, *The Far Eastern Crisis* (Harper & Brothers, 1936) p. 36 に“Shidehara is still in office. (...) It seemed clear to us that no steps should be taken which would make his task more difficult because certainly our best chance of a successful solution of the situation lay in him.”とある。